

---

blue spring

スカフィ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

blue spring

### 【Nコード】

N5688A

### 【作者名】

スカファイ

### 【あらすじ】

主人公の『拓郎』が、あこがれの彼女『愛子』からラブレターを貰った。放課後、拓郎は嬉しさのあまり待ち合わせの場所に向かう。だが、そこで待っていたのは…！？

俺の名は『森下 拓郎』とある高校に通う17歳。

俺はこれといって頭がいいわけでもなく、運動神経がいいわけでもない、

ましてや顔だって良くなければ、ガタイだっていいわけではない。どこにでもいる普通の男だと思う。

そして、こんな俺でもある女の子を好きになってしまった。

彼女の名前は『浅田 愛子』といって俺と同じクラスの女子である。

「ヤベエ、遅刻だっ」

俺は急ぎ足で教室に向かった。

俺の担任は時間に厳しいので一分の遅刻も許さない。

遠くに教室が見えた。

（どうやら間に合いそうだな…）

と、そう思った時、廊下の奥から誰かが走って来る気配を感じた。振り向くと奥から女子生徒が走っていて、

「間に合うわよね？」

と、とつさに俺に問い掛けた。

「あ、ああ…」

俺は少しスピードを落として答えると、

「ほらほらあ、急がないと遅刻しちゃうゾ！」

と言いながら、彼女は俺を追い抜いた。

…そう！彼女こそが俺の憧れの天使！『愛子』ちゃんのだっ…！

かすかに匂う愛子ちゃんの髪の毛の香りが俺を幸せにする…。

その幸せにひたりながら走ってるもんだから俺は思わず自分の教室を通り越してしまった…！

「ア・アレ！？」

たちまち教室から笑い声が聞こえた。

「森下くん、何やってんの！？」

愛子ちゃんが入口の前で笑いながら言う。

「あははは…」

俺は、照れながらそそくさと教室に入った…

今日はかなりハッピーだ。

あの愛子ちゃんと一緒に教室へ入れたのだから…昼休み中俺はメロメロだった。

その時後ろから声がした。

「森下くんっ、あの……」

振り返ると愛子ちゃんが立っていた。

「あ、何？」

「…うん、あのね…」

彼女が近づいてくる。俺は固まっていた。心臓がドキドキして息が苦しい。

「……これ。」

彼女は封筒らしきモノを差し出した。

「俺に…？」

「…うん…」

俺はその封筒を受け取った。

「じゃっ…」

そう言っただけで彼女は廊下の奥へ走って行った。  
俺はすぐに震えた指で封筒を開けた。

“放課後、体育館の横で待ってます”

とだけ書かれていた。

(これって、まさか…告白…?)

…その時俺は愛子ちゃんと初めて話した日の事を思いだした…。

…あの日はちょうど英語の宿題があった事を忘れ、休み時間に必死に問題を問いてた。

「宿題やるの忘れたの…?」

俺は相手の顔を見ず

「ああ…、今日当てられる可能性があるからさ。一応やんなきゃと思っ…」

「……はい、コレ写して」

一冊のノートが目の前に差し出された。

「ーえ? いいの…! ?」

「うん。困った時はお互い様だよ」

と、彼女はニツコリと笑った。  
その時、俺は初めて彼女の顔に気付き、俺はその笑顔に一目惚れしてしまった。

（ああ、ホントに天使みたいな人だなあ…）

「ヤダア、さりげなくアピールしてない？愛子」

奥で彼女の友達が冷やかしていた。

「違うわよ」

と彼女は自分の席に戻って行く…。

…そう…その日以来俺は彼女に夢中なのだ。

そして彼女も俺の事を…？

…まさか…でもあの日ノートを見せてくれた彼女の丸みを帯びた字で、

この手紙は書かれている。

（…うそだろ…？）

そして放課後がやって来て、俺の緊張はピークに達してた…。

放課後になり、俺はすぐに教室をあとにして急ぎ足で体育館に向かった。

（彼女がいる！彼女がそこで待っている！）

…けど、彼女はまだそこにはいなかった。

（早く来すぎたかな？放課後とは書いてあっても時間の事書いてなかったしな。）

…なんて細かい事を考えていたその時、俺の背後から物音が聞こえて来た。

…ジャリジャリ…

（これは…彼女の足音かな…？）

俺はゆっくりと後ろを向いた。

（ん…？）

「…ごめん、拓郎君を呼んだのあたしなの…」

…そこにいたのはあの「愛子」ちゃんではなく、彼女といつも一緒にいる友達の「吉田美代子」だった…。

「…びっくりしたでしょう？手紙の主があたしだったなんて…」

「う、うん。まあ…その…」



びつくりしたどころか正直ショックだった。

俺は何よりも愛子ちゃんだと信じ込んでいたし、  
彼女はお世辞でもカワイイとは言えない。

カラダはブクブク太ってて髪の毛はショートの天パ！。

顔は吹き出物だらけで眼鏡をかけてる。

彼女には失礼だが、学校で一番かわいくないんじゃないかと思った  
くらいだ。

そして彼女は俺に言ったのだ…！

「ずっと好きでした。付き合ってください。」

俺は血の気がひいた。

あまりにも予想していない出来事で美代子から告白されると思って  
なかったから…。

「…わかってる。」

拓郎君があたしの事を何とも思っていないって…。

ねえ、正直に答えてね…太ってる人キライ？」

「え…！？」

俺は思わず口をつまらせた。正直たしかに苦手だからだ。

「…じゃあ、あたしががんばってやせたら…」

拓郎君、あたしと付き合ってくれる？」

「いや、あのさ…」

俺はそんな事よりも自分には好きな人がいる事を彼女に伝えようとした。

だが、彼女は

「お願いっ！ウソでもいいから『うん』って言って！

そうすれば、あたしやせられる様な気がするの！お願い」

「いや、そうじゃなくて…」

「お願いっ！拓郎君！」

彼女は真っ直ぐな瞳で俺を見ていた。

その瞳からは彼女の俺への気持ち痛いほど伝わって来る様な気がして俺は思わず…

「わかったよ…。」

「…ありがとう。あたしもう行くね。わざわざ来てくれてありがとう…」

そう言って彼女は走って行き、俺はその姿をじっと見つめていた。

## 01 (後書き)

よろしかったら感想や質問など下さい。  
お待ちしております。

翌日、教室に入ろうとしたら入口で愛子ちゃんと目が合った。

すると彼女は俺から目をそらし、うつむいたままこう言ったのだ…。

「昨日の事だけど、アレが答えなの？」

「え？アレ？」

俺はとつさに美代子が愛子ちゃんに昨日の事を全部話したと気付き

「うん…」

と俺は言った。

すると彼女は黙ったまま自分の席に座った。

そして美代子はその日学校には来なかった。

…多分かなりショックだったんだろう…

・さらに翌日、俺の親友のけんじがイキナリ

「おマエ、美代子と付き合ってるの？」

と言ってきた。

「は！？何で急にそんな事言っただよ…」

「…いや今、学校中の噂なんだよ！」

お前と美代子が付き合ってるって…！俺かなりびっくりしたんだけど…」

「は！？」

「いや、朝からその話題がスゴイぜ…」

ホラ、美代子の見た目が見た目だけに…さ。

お前の女の趣味もかなり疑われてるぜ…。ははは…」

そう言っただけは笑い、俺は…ワケがわからなくてボーゼンとしていた…。

一体、何故そんな噂が流れ出したのだろうか…？

教室に入るとみんなが俺を見ていた。

その日は愛子ちゃんはもちろん、美代子も学校に来ていたので、すごい居心地が悪かった…。

…だけど何故そういう噂が流れ出したんだろう…。

考えられる事は美代子が俺を呼び出したあの日を誰かが目撃したってことだ。

別に隠れて告白された訳じゃないから見られても不思議ではない。だからといって、それで付き合ってるなんて噂を流されちゃこっちはたまったもんじゃない。

愛子ちゃんや美代子にも迷惑かけるし、誤解なんてされたくない。

俺は一人イライラしていた。すると

「あの話、ホントなの？」

「拓郎君、正直言って悪趣味だよ！」

「と、近くに座ってた女子どもが小声で俺に問い掛けた。

「ね、ね、ねー、美代子のどこがいいのお？」

「そうよ！あの子よりカワイイのなんてクサるほど学校にいるのに。あつ！もしかして拓郎君ってアレ…！？」

「え？何よ。アレって……。」

「ほらあ、太ってる人が好きな人の事を言うじゃん！デブ専だっけ？」

「あゝあ、言うよねえ！あははは…」

俺はこの二人の会話に呆れて何もいえなかった…。

昼休み、俺は親友のけんじと屋上にいた

「なんだあれ…デマだったの？」

「当たり前だよ！だいたい何で俺が美代子なんかと付き合っただよ！」

俺には…あ、愛子ちゃんがいるんだもん…。」

「なにオマエ、愛子が好きなのか…？」

「……俺、たしか前に話したよな？愛子ちゃんが好きって…  
なんでお前はいつも人の話忘れるワケ！？

普通だったら美代子と俺が付き合ってるって聞くだけで  
嘘か本当かすぐにわかる話だろう！

お前何年俺とツルんでんだよ！」

「…え！？そうだったけ？ごめん、オレ頭ワルイから…。

でもよー、愛子ちゃんって美代子の為にオマエに手紙まで渡したん  
だろ？

それってオマエに気がないって事だよな？」

「……痛いトコつくね…。そう。そうなんだよね。はあ…。」

「じゃあ、このまま付き合うか？美代子と…。」

「……お前、それ笑えないジョークだよ」

「ははは…しかし何でそんな噂流れ出したんだろうなー」

「それは俺が聞きたいよ…愛子ちゃんには誤解されそうだし、  
美代子がそれを本気にしてたら怖いし…」

だが、俺はいてもたってもいられなかったので、  
愛子ちゃんを呼び、誤解だって事を言う事にした。

「あ・あのさ、噂の事なんだけど…」

「……………うん。」

「美代子から聞いてると思うんだけど……」

「……聞いたよ。だから付き合ってるんでしょ？良かったね」

「……いや、そうじゃなくって……アレはデマなんだ……」

「……………？」

「誰かが流したんだ。単なる噂なんだ」

「……………ひどい……。」

「……は！？」

「だってわたし、美代子の口から聞いたんだよ！  
拓郎君と付き合ってるって！なんでそんな事言うの？」

「え……あ、いや」

「まさか……美代子をからかったんじゃない……サイテー！」

「え？からかう？」

「もう……森下君の事、信じられない……」

そう言っただけで彼女は走って行った……。



・なんていう事だっ！あの噂を広めたのは美代子だったのだ！  
俺はさすがにムカついて美代子を放課後体育館の横に呼び出し、美代子に問い詰めた。

するとんでもない答えが彼女の口から飛び出したのだ！

「だって付き合ってるじゃないあたし達……」

何を言ってるんだ？このオナナ……？

## 02 (後書き)

ここから美代子が進化していきます(笑)

「だってあたし達付き合ってるじゃない」

「付き合ってる？何、勝手に決め付けてるんだよ！」

「拓郎君、この前言ったじゃない…ヤセたら付き合ってくれって…」

「あれは美代子が嘘でもいいから言えって言ったから、言ったんだよ！」

「じゃあ嘘だったの！？あたしを騙したんだ！あたしは真剣なのに…」

「は！？意味わからん事言うな！大体そんなセリフはヤセてから言えよ…」

「ヤセたわよ。昨日がんばってヤセたわ。あなたに好かれたい為に…学校まで休んで…好きだから…」

「…？」

…俺は意味が解らなかった。

美代子が言ってる事は単に俺をからかっている様にしか見えない。でも、彼女の表情は本物に見える。

演技がうまいだけなのか？

もう、とにかく俺は笑ってしまった……。

「あつははは…。もうやめようぜ、こんな事…。」

お前も何ムキになってんだよ。もう終わり！やめだ！やめっ！」

「……………」

「とにかくっ！あんな噂はもう流さないでくれよ。俺帰るから」

そういつて俺は帰った。

美代子はうつむいたまま小声でブツブツ言ってたが俺は気にしなかった…。

） （着信音）

「ん？携帯か？」

俺は携帯の画面を見た

非通知着信

（ん？）

とは思ったが俺は携帯に出た

“ピッ”

「はい、もしもし」

……。

「……？おい、誰？」

……もしもし。

あたしだけど……

「……み、美代子？」

ピンポン

さっすがあ！よく

あたしの声って

気づいたよね

「ーっていうかさあ……何で俺の番号知ってんの？」

そりゃあ好きな人

の番号くらい知っ

てるわよ

「普通さあー本人の許可をもらっただろ？」

それよりあたし

さっき拓郎君が

何に怒ってたの

かわかったの……

「はあ……！？」

ただそれが

言いたかったの  
じゃあね！

“プッ！ツッ、ツッ、ツッ…”

「…ばかじゃないの あいつは…」

俺は一人携帯につぶやいていた…。  
そして、辺りは真っ暗になっていった…。

その翌日

「みんな聞いてよ！あの噂はデマだから！  
俺は美代子とは付き合っていないからな！」

俺は立ち上がってみんなに聞こえるように言った。  
もう耐え切れなかったからだ。

「ホントなの？美代子、森下君とは付き合っていないの？」

愛子ちゃんが美代子に聞いているのが聞こえた…。

「……………うん。」

「ちょっとお！何であんな嘘つくのよ！」

「あんたさあ、自分でどんな姿かわかってんのぉー！」

嘘なんかつくと余計醜くなるだけじゃん!!」

一気にクラスの皆から美代子に文句が押し寄せた。

愛子ちゃんは必死に美代子をかばってたが収まりが効かない状態だった。

突然、美代子が泣きだした。

「美代子、外に行こう今は出ようよ…」

愛子ちゃんは美代子を引っ張り俺の方へやって来た。

「森下君、みんなの前で言うなんて…。最低…」

今までに見たことのない顔で俺を見てそう言った。

そして二人は教室を出ていく…。

俺はショックで突っ立ったままだった。

「……………」

大体何で俺があんな事いわれなきゃいけないんだ!？  
悪いのは俺じゃない…俺だって被害者なのに…。

あの天使のような笑顔を曇らしてしまった自分に  
嫌悪感が押し寄せ、俺はやり場のない怒りと戦っていた…。

### 03 (後書き)

どんどん絡まっていく糸。

…どこで切れるかな？



放課後の教室。

俺は愛子ちゃんに呼ばれて待っていた…。

「ごめんね。急に呼び止めたりして…」

俺は正直、嬉しかったりもした…。

「ああ、別に気にしないで、どーせヒマだしさ…」

愛子ちゃんは何か考えてるのか、俺に背中を向けていた。

少しの沈黙の後、ようやく重く口を開いた。

「美代子の事なんだけど…」

「…あ・うん…」

（やっぱりその事が…）

俺は予想通りだったので少し面白くなかった。

「…もう少しやさしくしてあげられないかなー？」

「ーえ!？」

俺がその言葉に反応すると、愛子ちゃんは俺を見つめ、

「何か、美代子に対してすごく冷たい感じがするの…私の知ってる森下君とはイメージが違う気がする…」

「……そ・そう？」

俺は愛子ちゃんの言葉にすごいショックを受けた…。

「彼女ね…ホントにいい子なんだ…。

ホントに森下君の事好きなのよ…

がんばって森下君の為にダイエットして少しでもキレイなろうとしてるの…」

「…でもあいつ、俺と付き合ってるなんて嘘付くから…

俺はそれをはつきりさせただけだよ…」

「…うん、それは美代子が悪いよね。

でも、森下君、美代子がヤセたら付き合う気はあるんでしょ？」

「いや、あれは美代子が強引に…」

「…じゃあ、森下君も美代子に嘘ついたって事！？」

お互い様だよね？今回の事で…」

「……でもー」

「とにかくっ！言い訳はいいから。

付き合う気ないならはつきりと美代子に言ってよ！

このままだと美代子が可哀相だから…」

「……………ああ」

「用はそれだけだから…じゃあね。」

そのまま立ち去る愛子ちゃん。

小さくなっていく足音が更にむなしくなっていく。

（…なんだか俺、愛子ちゃんに嫌われてるよな…）

俺はすごいブルーになった…。

その日の夜、部屋で落ち込んでたら携帯が鳴った…。

「もしもしー…」

……………。

（いけねっ！ボツ）としてたから

画面見ないで電話に出てしまった！美代子かも…）

ハア…ハア…

電話の奥から不気味な声が聞こえた。

うつ…うつうつ…

「も、もしもし!？」

あ…あたしだけど…

やはり美代子だった。

俺は電話をすぐ切ろうとした。

今、吐いてた…

美代子からの言葉。  
俺は問い返す。

「吐いてたって?」

…うつっ!

俺はあまりの気持悪さに  
思わず怒鳴る。

「いい加減にしてくれないかな!？」

それはこっちのセ  
リフよ! 拓郎君ズル  
イんだもん。  
あたしがヤセても付き

合ってくれないし…

美代子も切れ気味に言い返す。

「え？ヤセた…？」

俺は「どこが？」と言わんばかりに  
声を裏返しながらかき返した。

「今、ヤセたって言った？」

そうよ！がんばつ  
て1キロヤセたのに  
さ…皆の前であん  
な事言われるなんて  
話が違つてしょ？

「ちよつ、ちよつと待てよ！  
お前ヤセたらって言ってたけど、  
どれくらいの事言ってたんだよ」

え！？1キロでもヤ  
セた事には変わら  
ないでしょ…？

「…いや、俺はてつきりもつと…」

うん。だから2キロヤセようと思つて。今吐いてたの

「いや、だから…普通はさ、もつとスリムな事を言うだろ？」

1、2キロじゃそんなに変わらないだろ？」

……なによ…

もつとヤセろつて言ってるの？

少しずつ美代子の声が荒くなる。

「だからさ…」

アンタ、あたしを殺す気？

「ーは!?!」

殺す気かって言っ  
てるんだよ！！

“ プッ ”

ドスのきいた声で電話を切る美代子。

俺は携帯を見つめながら呆然としていた。

彼女は何かおかしいのか？

それともダイエットのせいなのか？

俺の中での不安は更に拡大して行っ  
た。

“ プッー プッー プッー ”

## 04 (後書き)

ホントにいたら嫌だな(笑)



「あいつ完璧にヤバイんじゃないか？」

ゆうべの電話の話をした後のけんじの最初の一言だった。  
俺はゆっくりと地面に座り頭を頷く。

「うん。急に態度が変わるトコなんて、マジびびったよ。」

「お前、もっとはっきり言うべきだよ。  
美代子に…嫌いなら嫌いとき。」

“ピピッ”

「何だ…？メールの音か？」

俺はビクツとしながらメールを開く。

“今日一緒に帰ろうよ。美代子より”

と書いてあった…。

「こりゃあ、重症だな。怖いや…。」

けんじが苦笑しながら言った…。

ホームルームが終わると俺は一番先に教室を出た。  
美代子から逃げる為だ。

（そうだ…！ あのメールは俺のトコに届いてないフリをすればいいんだ！）

確か、俺がメルアドを直接教えた訳じゃないから  
届かないフリをすればあいつだって届いているかどうかかわらない  
はずだ…。  
俺は急いで学校から出ようとした。

その時である。

“ピピッ”

メールの着信音が鳴る。

“一緒に帰ろうって言ったのに何で先に教室出たの（＜―＞）”

（っっていうか、お前が勝手に決めた事だろ！？）

俺は思わず心の中で突っ込んだ。  
とにかく無視だ無視。無視してしまえっ！

“ピピッ”

またメールが来た。

“どーせ拓郎君はこのメールを無視するんだよね？

届いてないフリして。

でも、あたしさっき見たんだ。

屋上でけんじ君と話してる時ちゃんと届いていたよね？”

と書かれていた。

俺は学校の近くにあるゲーセンに入った。

（ふん！どーせ人を脅かそうと嘘ついてるんだっ！  
その手にのるか！ここで少し時間潰して帰るか…）

そう思って俺はゲームをしようとした時

“ピピッ”

またメールが来た。

“みつけたっ”

「……………！」

（ま、まさか？）

俺は後ろを振り返った…！

美代子が入口に立っていて、手を振っていた。

俺は美代子に気づいてないフリをしてそのまま裏口に向かって歩いた…。

（な・なんであいつはここにいる事わかったんだ？

それともずっと後をつけて気づかなかったただけなのか！？）

その時いきなり後ろから腕を引っ張られた…！

俺は恐る恐るうしろを振り返える…！

「何で逃げるように歩いてんの…？」

それは美代子ではなくけんじだった。

「おいつ、さっき入口に美代子いなかったか？

こつち向いて手を振ってたんだ…！」

俺は動揺しながらけんじに問い掛けた

「うつん。俺も今入って来たトコだけど。

誰もいなかったぜ。

…なにお前、美代子の幻覚みたんだ。

ホレてんじゃないの！？」

「…？ いや、だって確かにあいつが立ってたんだ…」

俺は周りを見渡した。

しかし、美代子の姿はなかった…。

（幻覚だったのかな？

でも、メールには見つけたって書いてあるし…）

俺は不安ながらもけんどゲームをし、店を出た。

「早いトコはつきりさせろよ。」

「ほんとだよな。うん明日には言つよ」

俺は自分に言い聞かせる様に言った。

「じゃっ！明日な」

「ああ…」

そういつて俺達は別れた。

“ピピッ”

またメールが来た…。

“ゲームは楽しんだみたいね（＾Ｏ＾）  
ゲームに夢中になってる拓郎君の顔ってカワイイ”

俺は

（…やはり美代子を見てたんだ…）

なんて冷静に思いメールにはずっと無視してた…。

## 05 (後書き)

感想おまちしております。

翌朝、俺はかなり頭に来てしまった。

…だって俺が寝てる間に美代子からのメールが24件も入っていたから…

「ふう…」

俺は仕方なくメールをみた…。

“今日は遠くから拓郎君の夢中になってる顔見られたから幸せ…  
今、何してんの？”

…そんな事から美代子のメールが始まった。

“今日の夜御飯はグラタンとサラダだったよ。  
でもカロリー高いからサラダだけにしたかったんだけど、  
グラタンも少し食べちゃった”

その後…

“ふう…。やっぱり吐いたよ。  
さっき電話に出なかったね。わざとなのかな？”

“ねえ今ね、読みかけの小説があってこれは近いうち映画化されるらしいの…”



すっごくいい小説だから、ぜひ拓郎君と観に行きたいな（＾Ｏ＾）”

美代子のメールは確かに普通の女の子みたいでかわいらしかった。

でも、それも最初だけだ。

“ねえ、どうして返事くれないの？”

“わかってるんだよ。  
届いてるって…”

“いい加減にしてよっ！”

“お願い！返事してよ…  
拓郎君とメールしたいだけなのよ！”

…と、まあ夜中の三時とか四時とかに入ってたんだけど  
俺はマナーにしているから全然気づかなかった。

“おはよう。拓郎君。実はあんまり寝てないんだ。  
その方がヤセるからね。

それから、もう少しで3キロもヤセちゃうんだ。”

“でもこれ以上ヤセて欲しいなんて言わないよね？”

俺はとにかくメールを読むのはやめて留守電を聞いてみる事にした。

『一件目です。』

……  
う…うええ…ハアハア…おえっ！………ピーッ…』

（またか…）

俺はそのまま次を聞いた。

『二件目です。……拓郎君聞いた？』

美代子こんなにかんばってるんだよ？あなたの為なんだよ。  
私は今のままでいいけどあなたが今の私を好きじゃないから…。  
ぜいたくだね！拓郎君！…ピッ！…』

『三件目です。』

……ん…ああ…ああ…いい！…拓郎君！  
…はうあ…ああああ…！……はあ…はあ…はあ…ピッ！…』

（なんだ今のは…？まさか…喘ぎ声？）

そうおもった途端、

俺は思わず携帯をベッドへ放り投げてしまった…。

「な、なんだよ！あいつ…こんなまで留守電に入れるなよ！」

俺は完璧にアタマに来たので今日こそあいつにはつきり言う事にした。

（つーか、言ってるつもりなんだけどね）

俺は身支度をして家を出ようとドアを開けると

「おはよう。」

ーと、声がした。

目の前に美代子が立っていた…。

「何でお前、俺の家知ってるの？何でここに？」

「あ、ただ一緒に学校に行こうかな？って思ったから…」

「お前、それは答えになってないだろ？何で俺ん家知ってんだよ！俺、教えてないだろ？携帯だって何で知ってんだ！？」

俺は美代子があまりにも気持ち悪くなったのでムキになっていた。だけど美代子は－

「好きな人の事ならなんでもわかるわよ。もちろん色々な所から情報を収集して…」

「…美代子…はつきり言っとくけど、俺はお前とは付き合う気なんてないよ…！お前がいくら痩せようと付き合う気はない！」

俺ははつきり美代子の目をみて強く言った。美代子は顔をピクピクさせながら言い返す、

「…じゃあ拓郎君は嘘ついてたって事？ねえ！そういう事！？」

「嘘もなにも…俺は付き合うなんて一言も…お前が勝手に…」

「だったら、もつと早く言いなさいよ！」

私にここまでさせといて振るなんて…ズルイ！」

美代子は目に涙を浮かべながらその場を走っていった…。

でも、よかった。

これでもう美代子とは何もない。

言いたい事もはっきり言っただけの気持ち悪い行動ともオサラバだ…。

俺はすがすがしい気持ちで学校に向かった。

教室に入ると美代子が窓際の席でこつちをニラんでた。

（ふん！ニラんだって恐くねーよ…）

俺も美代子をニラむかのようにして自分の席についた。

「おいっ！聞いたよ…アレの事…」

けんじが俺に話しかけて来た。

「え？何を…？」

「お前、美代子とヤツたんだって？」

「はぁ！？」

06 (後書き)

こ・わ・い！

「嘘だつてわかるけど他の皆はどう思ってるかはわからないぜ…」

けんじがニヤニヤしながら言う。

俺は血の気が引いた。

だが、俺負けずにあいつに対抗した。

「みんな聞いてくれー！」

俺と美代子の噂を美代子から聞いていると思うけど、あれは嘘だからな！作り話だ！」

「ひどいよ！拓郎君！」

いくら勢いで好きでもない私とヤツたからって、作り話なんて言い過ぎよ！」

美代子が反論して来た。

「私…わかってたんだよ。」

拓郎君が私の事好きじゃないって…でも拓郎君、自分に好意を持ってる私を利用して誰でもいいからヤリたかつたんでしょ！？」

（何言つてんだ？このオンナは…）

俺は、美代子が対抗してくると思わなかったのだからかなり呆然としてしまった…。

「でも、あたしは嬉しかったの！

拓郎君があたしを抱いてくれた事が…。

拓郎君にはただのはけ口かもしれないけど…

あたしには大切な出来事だったのよ！うわぁ～ん！」

美代子は皆の前で大泣きし出した。

「み・みんな！こいつは嘘泣きしてるんだよっ！

俺は美代子にそんな事してないからなっ！」

「ホントの事よ！

拓郎君はあたしの喘ぎ声だって聞いているんだからぁ！」

今朝の携帯に入っていた留守電の事だが

突然の大胆なセリフにみんな騒ぎ出した…。

「あれはお前が勝手に聞かせたんだろーが！」

「ほらぁ！やっぱり聞いているじゃない！自分で恥ずかしくない？」

「……………！？」

更にみんなが騒ぎ出した。

確かに今の俺の発言は誤解を招く…。

今、俺が弁解しても騒ぎが大きくなるような気がして俺は黙ったまま席についた。



そして

「でも、みんな聞いて！あたしはちつとも不幸じゃないよ。

確かに見た目は悪いけど女として初めて幸せを感じてるトコなの…。

それだけで今は幸せなの！

だから拓郎君を責めないでね！」

俺は心底、美代子が恐いと思ってしまった。

「…毎回言っただけど、あいつおかしいよ。

変な世界持つてるぜー。恐いよー」

「ああ、はっきり言ったのに全然わかってなかった。」

「そついや、お前あいつの事昔から知ってたんだろー？」

「うん、まあね」

「あんな性格だったん？」

「さあ…。そこまで仲がいいわけじゃなかったからね」

「そつかあ…しかし、何であいつはイキナリ積極的になったんだ？  
今まで話すらあまりしなかったんだろ？」

「…ああ。」

俺はけんじと学校の屋上で美代子について話し合っていた。たしかに最近の出来事が急展開し過ぎてワケがわからない。

「よし、俺ちよつと美代子について調べてみるわ」

と、けんじが突然言った。

「ばか、やめとけ。あいつ頭おかしいから何すんかわからないよ。危険過ぎる…」

「はは…。大ゲサだな。大丈夫だよ。俺そーゆうのすっごい大好き！」

「…ふう。お前に何かあつても知らないからな！」

俺達は笑いながら教室に戻った。

教室に戻ると美代子が俺の席に座ってた。

「あ、おかえり拓郎君！待ってたの…」

「……なに？」

俺はそっけなく返事した。

「美代子ね、拓郎君に弁当作って来たんだー。ぜひ食べて欲しくって…」

「……………」

「ん…？なあに？」

「別に…」

「とりあえず昼休みになつたら食べてみてよ。」

そう言つて美代子は弁当箱を俺に渡した。

ふと周りを見渡すとクラスの皆がニタニタしていた。

「なんだかんだ言つて拓郎もまんざらでもないって感じたなー」

「意外にお似合いかもね〜！ひゅ〜×2」

（何も知らないくせに…。はあ…）

俺は席について弁当箱をカバンに入れた。

なんだか教室もだんだん居心地悪くなつて来た。

（大体俺は美代子ではなく愛子ちゃんが好きなんだ…。  
このままじゃ愛子ちゃんに俺の気持ちを伝えられなくなる…。）

昼休み。

俺はけんじと屋上で美代子からもらった弁当箱を開けて見た。

「お！？割とつまそーに出来てんじゃない。」

「…うん。でも気味が悪いよ。中に何が入ってるかわかんないし

…」

「はは…。なにに、玉子やウィンナー、そばろにチキンか…。これは焼肉かな？」

そういつて、けんじは焼肉らしきものを一口つまんだ…。

「あ・うめえや。キムチがきいてて食欲をソソる感じ。」

「じゃあ、お前が食ってくれ全部…」

「ワリイけど、そういう弁当は食えないね。君がきちんと食べなさい。」

「…はあ。食えるかなー？」

「まず食って見ろって！うまいぞ！」

俺は不安ながらも一口食べてみた…。

「……うまい！…」

「だろ？あいつは見た目よりは女らしいかもな。ははは…」

あんなにイヤイヤしていた俺だが、美代子の弁当を一気に全部たいらげてしまった。

「俺、食っちゃった…」

「いいんだよ。それで…。一応お礼言えよ。いくら嫌いな美代子で

もさ。」

「ああ……」

教室に戻るなり俺は美代子のトコへ駆け寄った…。

「美代子、弁当うまくいったぜ…ありがとうな…」

「…うそ？全部食べてくれたの？ホントにおいしかった？」

「ああ……」

「うれしい……」

美代子は泣きながら言った。俺も一瞬だが、美代子がカワイク見えた…。

## 07 (後書き)

展開がまた違う方へ流れていきます。  
感想おまちしております。

「あいつの家がわかったぜ…。少し遠いけどな…」

いつもの学校の屋上でけんじが真顔で言ってきた。

「ふゝん…。お前ホントに調べてるんだ…美代子の事…」

「確か、小学生から同じ学校だったんだろ？」

「じゃあ、学校での態度は何となくわかるだろ？」

「…いや、あんまり。暗い感じの印象くらいだよ…」

「…実は今は両親とは別居中らしい。」

「あいつには姉さんがいて二人暮らししてるらしいよ」

「あ、そうなんだ…。何で両親とは別々に住んでんの…？」

「…たぶん、実家は更に学校から遠いからかな？」

「だから少しでも近くに引越したんだろ…」

「…ふゝん。」

美代子から弁当をもらうようになってから一週間が経った。

その間俺はナンダカンダ言いながらも美代子からの弁当を残さず食

べている。

…ピピッ…

「お・メールだっ」

“ヤッホー 今、あたしからの弁当食べてくれてるかな？  
今日はハルマキ作ってみたよぉ〜（＜―＞）”

「ははは…。美代子らしいや。  
よおし、返事送ってやるか…」

…そう！俺はあれから美代子とメールもやるようになってしまった  
…。

特に理由はないが、  
美代子に対する気持ちを变えたら別にイヤなものではないように思  
えて来た。

確かに度を越えた彼女の愛情表現は怖い時もあるが、  
それさえなければそんなにイヤな気分ではない…。

“美代子、今日もおいしかった。  
ハルマキもかなりうまかったよ”

“ピッ”



送信ボタンを押した。

（俺ってズルイよね…

いくら弁当がうまいからって好きでもない美代子から  
毎日作ってもらうなんて…）

俺は弁当箱を袋に入れ、そのまま寝転がって空を見上げた。

俺は今、美代子に対して悪いと思った。

最近までの俺ならそうは思わない。

美代子の事なんてどうでも良かったはずだ…。

…なのに、美代子に罪悪感を感じ、美代子の事を考えてばかりいる  
…。

「よお、何考え事してんだ？」

ぼんやりしているに俺に気付いてか、  
けんじが質問してきた。

「…うん…」

「愛子っちか…？」

「……………」

「美代子か…？」

「…最近、よくわかんないんだ。自分の気持ち…」

「それって、美代子を好きって事なのか？」

「それはない。でも、前よりは悪く思ってたない…」

けんじは意味がよくわからないのか首をかしげていた。

「…そうそう、美代子の実家は肉屋だったよ。だから弁当とか肉がよく使われてるだろ？」

「そっぴゃ、肉多いな。」

でもあのキムチ味の焼肉はうまいよ。

肉屋の娘だから肉料理は詳しいってワケか…。」

「だから、太ってんだよ。」

肉の食べ過ぎで！ブクブクさ！

お前の三倍は食べてるぜー」

「……………」

「あいつの姉ちゃんも美代子みたいに太ってんのかな？  
…今度写真に撮って来てやろうか？」

俺はけんじの言い方にムカついていた。  
気付けば口を開いてる。

「もうやめろよ。そーいうの…。  
お前こそ美代子とやってる事一緒じゃねーか。  
ストーリーみたいの後尾けたりして…」

「…なに急にかばってんの？美代子はお前の事知りつくしてんだぜ！こっちもあいつの事知らなきゃ、手が打てないじゃん。」

「だから、もういいよ。前よりは美代子の事警戒してないし…」

「…わからないぜ。それがあいつの作戦かも…」

「大丈夫だよ…」

「なんだよ。お前は愛子ちゃんが好きなんだろ？」

「……あ、ああ。」

「俺達はまだ美代子の事知らな過ぎる！うかつに近づかない方がいい！」

けんじはムキになって言った…。

だが、それよりも俺が美代子に対しての気持ちの変化の方が俺は気になった。

（…まったくけんじにはマイツタ。

俺が被害者だったのにあいつの方が入り込んでるなんてね…。

まあ、あいつは完璧主義なトコあるし…

たしか、親父さんが亡くなる前探偵やってたとかどーとか言ってたっけな。

だからなのかな？プライドとか関係してんのかなー？）

と、まあ考え事しながら歩いてたら目の前に愛子ちゃんが立っていた。

「ちょっといい…?」

「う・うん…」

「…、久しぶりね?口きくの…」

「あ、そついや、そうだね…」

俺は少し緊張してた。

愛子ちゃんも何だかきこちなかった…。

「あ・美代子からの弁当残さず食べてるんだってね?えらいねー」

「…ああ。うまいからね。つい…」

「でしょー?」

実は私も森下君に作った弁当のあまりモノを美代子からもらってるの。

彼女が食べてってしつこいからさ。

それがかなりおいしくて、今は私からお願いしてるくらいよ!…あははは…」

「あ、そうなんだ!あははは…」

（何だか久しぶりに愛子ちゃん的笑顔を見た気がする…。  
その笑顔に俺はホレたんだよね）

俺は嬉しかった。

ここ最近では美代子の事で彼女をよく困らせていたから。  
そんな彼女と笑顔で話せたから…。

そして忘れかけていたドキドキ感が  
また俺を動揺させていた。

## 08 (後書き)

この主人公って単純ですよね？

感想お待ちしております。

俺はホント…幸せだったんだ。  
このひと時が…。

こうして愛子ちゃんと並んで歩く事が夢だったんだ。  
でもその愛子ちゃんは俺と美代子の『恋』を願っている。

「美代子とはつき合って行けそう？ やっぱりまだ無理？」

正直…胸が痛い。

「…彼女に対してまだそんな気になれない…。  
でも、前よりは嫌いじゃないよ」

「それは料理が上手かったから？ ポイントが上がった？  
あゝん、男の人ってやっぱりそういうの求めてんのね！  
私もがんばらなきゃなー。」

「ははは…それもあるけど、  
俺が美代子に対する気持ちを变えたって事が大きいよ…。」

「なんでまた…？」

「まあ簡単に言えば、見た目から入り過ぎたって事かな？  
中身を重視したら中々いないくらいイイ子だなーって…。」

「うん。彼女はイイ子だよ。」

私が保障する…もう、遅いぞっ！ 今頃美代子の良さに気づくなんて  
…。」

そう言って愛子ちゃんは俺の肩を叩いた。  
ホントそういうトコが好きなんだ…。

「ごめん、私行かなきゃ…。またね…」

遠ざかっていく愛子ちゃん。

「……………」

（やっぱり、俺は愛子ちゃんが好きなんだな。  
話してて安らぐや…）

見えなくなるまで愛子ちゃんを見つめていた。

放課後。

「拓郎くん…あたし…今日は用事あるから先帰るね…」

と、美代子が言った。

「あ・うん。明日な」

「また後でメールするから…じゃあね」

「おっつ！」



最近の放課後は美代子と話しながら帰るコトもしばしばあった。急に一人になると何だか物足りない気がする。完璧に美代子のペースにハマッてる自分に恐い気もするが…。

「森下くうくん…」

後ろから愛子ちゃんが走って来た…。

「今日は美代子と一緒にじゃないの？」

「なんか用事があるってさ。今帰るんだ？」

「うん。じゃあ途中まで一緒に帰ろ。」

「そうだね」

さつきもこうして一緒に歩いていたのに遠い昔に感じる。

それだけ待ち遠しかったのかな？

あどけない笑顔で愛子ちゃんは聞いてきた。

「ねえ、なんか聞きたい事ある？」

美代子の事とか…私の知ってる事なら教えてあげる…」

「…え！？ああ、じゃあ…」

なんで美代子は俺の事好きになっただんなーって…」

「やだあ、そんな事本人にまだ聞いてなかったのー？」

「ーっていつか、最近まで話すらしてなかったし…。」

「…うん。私、最近知ったんだよ。

美代子が森下君を好きだったこと。

きっかけはね…昔、美代子がいじめられた時、  
森下君が助けた事があったらしいの…。」

「え？俺が…？」

俺はすごく驚いた…。

確かに美代子とは昔から同じ学校にいたが、  
口を聞いた記憶も正直ないし…。

何故、

美代子は俺にその事を先に言わなかったんだろう…？

「え…？俺、美代子を助けた記憶なんてないけど…」

「…うん。美代子も言ってた…

きつと拓郎君は忘れてるだろうって…

小学生の頃の話だしね…」

「じゃあ、それ以来ずっと俺の事を…？」

「…うん。中学も高校も森下君を追っ掛けて来てるの…。」

「…そう…なんだ」

俺は言葉が出なかった…。

「美代子が俺に対する気持ちが少し度を超えてる理由が何となくわかったよ…。」

彼女からすれば長い時間俺に近づける日を待ってただね…。」

「そうよ。私にでさえ自分の気持ちを隠してたんだもの。そーとーな想い入れよ…。」

「でも、

俺ずっと美代子と話した事ないと思ってたけど過去にあっただな〜」

「ふ〜ん…ホントに森下君忘れてるんだ？

さっすが美代子ねえ！。森下君の性格見抜いてる…。」

私はそこまで森下君の性格見抜けないよ」

「…だって愛子ちゃんとは会ってまだそんなに時間経ってないもん。仕方ないよ」

「……そうだね。」

愛子ちゃんはそういつて急に顔をうつむいた…。

「愛子ちゃん？」

「……ごめん。」

「…？」

「前から聞こうと思ってただけど…。」

「う・うん……」

「……あっ・あのね……」

……ピピピ……

突然、俺の携帯が鳴り出した。

何かを言いかけた愛子ちゃん……それも真剣な顔つきで……だ。

俺はすぐにでも続きを聞きたかったんだけど……そうはいかない。  
俺は電話を取り出し、通話ボタンを押した。

「あ・ごめん。……はい、もしもし……」

『拓郎か？俺、けんじだけど……』

「うん、どした？」

『今……美代子の家の前にいる……』

……その一言から事件は始まったんだ。

## 09 (後書き)

次回から急展開！お楽しみに！

けんじからの電話だと気付き、  
俺は愛子ちゃんから少し離れ、小さい声で

「お前なあ、そーいう事やめろよ！バレたら問題になるぞっ！」

『ここまで来て今更やめられるかよ。

何が何でも俺は美代子を調べあげてやるぜ……』

「何でそこまでムキになるんだ？  
親父さんの事関係してんのか？」

『ばゝか。親父は関係ないだろ？  
死んだ親父なんか今更どうでもいいさ……  
でも、気持ちにはわかるな。俺は今この状況にハマッてるし……』

「遊び半分でやるなよ。犯罪だぜ！」

『ただ単純に美代子の事知りたいだけさ。  
あつ！美代子が出てきたっ！またあとで連絡する。じゃあな……』

「あつ！おいっ……」

…プッー・プッー…

けんじは一方的に電話を切った。  
俺は半ば呆れ、呟いた。

「ーったく…」

「どうしたの…?」

愛子ちゃんが心配そうに俺を見てた…

「あ・いや…」

(けんじの事は愛子ちゃんに言えないや。)

俺は携帯をポケットに入れると、話を誤魔化す様に問いかけた。

「そつえば、さっき何か言いかけてなかった?」

「え?…あ、うん…もういいです…」

「何だよー! 気になるじゃん。言ってよ。ちゃんと聞くからさ」

「…大した事じゃないの。わかりきった事なんだけどね…」

「…うん」

愛子ちゃんは一唾飲むと俺を見た。

「どうしてあの日来なかったの…?」

「え? あの日って?」

「私が少し遅れたのも悪かったけどさ…」

「…いつの話?」

- 俺は嫌な予感がした -

「だから私が森下君に手紙を渡した日…」

「!？」

「…？…来なかったでしょ？あの日…」

- 俺は確認するように言った -

「だって、あの場所には美代子がいたんだよ…。」

そこで俺は告白されたんだ…」

「…??？」

「え？じゃあ…あの時の手紙は愛子ちゃんが俺宛に書いたの？」

愛子ちゃんは急に後ろを向いた。

「…あ、ち・違うわよ。今の忘れて…」

そう言っただけから少し離れた…。

俺は愛子ちゃんの肩を掴み、

「待つて！マジで正直に答えてくれよ！

あの日俺を呼び出したのは美代子じゃなくて愛子ちゃんだったの？」



「……………」

「愛子ちゃん！」

愛子ちゃんはゆっくりと俺を見て

「…うん…あの手紙を書いたのは私で、森下君宛よ…」

そう言った。俺は一瞬真っ白になったが、  
理性を保ち、続けて質問をした。

「あの日…俺を手紙で呼び出した事…美代子は知ってた…？」

「ううん。でも、私の気持ちを彼女に話した事あるわ…」

「え！？気持ち？その…俺を呼び出した理由ってやっぱり…」

「…そうよ。私、森下君の事…好きなの」

「…あ…どうも…」

俺は一気に顔が火照って来た。

「でも、森下君は今は美代子の事好きなんですよ？

私の出るスキなんてないよね…」

「…あ、いや。スキがないどころかスキだらけで…」

俺はデヘヘといわんばかりに舌を出す。

だが、愛子ちゃんは真顔で遠くを見ていた。

「…でも、私、美代子の事裏切れない。  
だから森下君…美代子の傍にいてあげて…」

「ちょ、ちよつと待つてよ。」

美代子は愛子ちゃんの気持ち知つてて俺に告白したんだよ！  
それって友情を裏切つてる事にならないか？」

「…私も美代子には何となくいいな…って軽く言つてただけだから、  
ホンキにしてなかったかも…」

「だからつて君に何も言わず俺に告白したつてのか？」

俺は美代子のやり方にだんだん腹が立つて来た。  
それでも愛子ちゃんは美代子をかばう。

「…私、知らなかったのよ。  
…同じ日に告白しようとしてたなんて…  
あの日、森下君私の事キライで来なかったんだと思つてた」

「でも、美代子は言つてた。愛子ちゃんに手紙を書かせて俺を呼ん  
だつて…」

「え…！？」

しばらく間があつた…。

愛子ちゃんは訳がわからなくなつてる様子だつた…。

「美代子は…私が手紙を渡したのを知つて森下君に告つた…。」

たしか美代子は昔から森下君を好きだったはずだから…  
私に取られるのが嫌で…

そういえば、あの日…美代子の頼みで  
プリントを先生に渡しに行って少し遅れたのよ…」

「ほら、その間に美代子は俺に告白したんだよ…  
明らかに美代子のワナじゃん…」

愛子ちゃんはゆっくりと肩を落とす

「…そうね…でも、それだけ森下君が好きなのね。  
誰にも本当の気持ちが言えなくて…  
親友の私にさえズルイ手を使ってまで森下君と付き合いたかった  
のよ…！」

「…いや、あのね…そこまでして美代子をかばわなくてもいいんじゃない？

俺だって…あの日期待してたんだ…もしかしたらって」

「え？」

「…だから…俺も前からずっと気になってたんだ…愛子ちゃんの事は…

でも、君は俺と美代子にくっつけようとするから俺の事好きじゃないと…。」

「逆よ！好きだから応援してたのよ。

大好きな美代子と森下君だからうまく行ってほしかったの！」

「……………」

「…でも半分はツラかった…。  
二人がだんだん仲良くなってるの見て…」

「愛子ちゃん…」

俺は愛子ちゃんの肩を強く掴んだ。

愛子ちゃんは俺を見ると首を横に振った。

「…でも、もう遅いよ…。」

美代子だってその気だし…

クラスのみなんだって二人は付き合ってるんだと…」

「…俺は…前から言ってるけど美代子とは付き合っ気ないよ」

「そんな事言っても…毎日弁当食べてるし、

放課後は二人でよくいるじゃない！どう見ても付き合ってる様にしか…！」

「君は知らないんだよ、美代子の本性を…

彼女は確かに外見は可愛くない…

でも、そういう人って性格は美人だって

よく言われてるけど美代子を見たまんまだよ。

彼女は欲しいモノはどんな手を使ってでも手に入れるタイプだよ。  
今日それがはつきりわかったよ…」

「もうやめてよ！美代子の悪口は…」

愛子ちゃんは混乱のせいか急に泣き出した…。

「愛子ちゃん…」

俺は泣いてる愛子ちゃんを見てるしかなかった…。

その時携帯が鳴った。

画面にはけんじの名前が出てたのだが、電話には出なかった…。  
その時入ってた留守電のメッセージこそが事件の始まりだった…。

10 (後書き)

次回はけんじ編です。

「もしもし…けんじだけど…」

今、美代子の家の中にいる。ハア…ハア…

俺…とんでもないもの見てしまったんだ…ハア…あいつ…ヤバイよ…  
いいか！絶対美代子には近づくな！…またあとで連絡する…」

…ピッ…

「ちくしょう…何で電話に出ないんだ？」

俺の名前はけんじ。

知つての通り拓郎の親友とでも言おうか？

実は今日は美代子の普段の生活を知る為に後を尾けた。

多分、美代子も拓郎に同じ事をしたであろう。

だからではないが同じ事をした。みた。

アパートの前で隠れながら立っていたら、美代子のヤツが出て来た。

俺は拓郎と電話してたからすぐに切ったんだ。

そして俺はアパートの階段を上がり、

ちようど美代子と姉さんの部屋のドアの前に立って見た。

ドアのノブをひねってみると鍵は掛かってなかった。

中を覗くと誰もいなかったんでこっそり入ってみた。

悪い事してるのはわかってるが

俺の好奇心なのか冒険心なのかはわからないが  
押さえ切れない何かがあって行動した。

「……………」

…今…それを後悔してる…。

拓郎の言う様にヘタに関わらない方が良かったかも…。

（はっ！鍵が開いてたって事はすぐに戻って来るって事だ…！  
早くこの部屋から出よう…！）

俺は急いで出ようとした…。

“カンカンカン”

（ヤバイッ！美代子の足音だ…ちくしょう…ベランダからは降りられないし、  
隠れるしかないのか！？）

俺は急いでクローゼットに身を隠した…。

“ガチャ”

美代子がドアを開けて入って来た。

俺は隙間から美代子の姿をはっきり確認すると息を殺す。

（…俺は見てしまった…美代子の秘密を…  
あれは…明らかにそうだ…絶対にそうだ…  
早くここから出なければ…）

美代子は鼻歌を歌いながら台所にいた…。

ああ、多分 明日の弁当の材料でも買って来たんだろう…。  
その姿は健気に見えるはずだろうが真実はそうじゃない…！  
彼女は狂ってる…！

イカしてるんだ…俺はクローゼットの中で震える身体を必死に押さえた。



そうすればそうするほど震えは襲って来て気が狂いそうだった…。そして、無意識に携帯を持っていた右手が何かに当たった！

“カタッ”

（ヤバイッ…！）

美代子はすかさずこっちを見た…。

（…バレたか？…）

しかし、美代子はあまり気にせず台所に立っていた。

（…ふう…良かった）

「何してるの…？」

俺はハッとした…隙間から覗くと、目の前にいた美代子と目があつた…！

その瞬間、ぱつとドアが開いた…！

「いらっしやい…けんじくん…」

美代子はニッコリと微笑んでいて、右手には包丁を持っていた…。

「ねえ…アンタさあ、ストーカーなのお？」

美代子の顔は急に険しくなり、俺の顔に包丁を当てた。

「違う…ジョークなんだ…美代子を驚かそうと…」

「嘘つき！このお調子者がっ！バレバレなのよ…」

「ははは…バレたか？わかった…警察にでも突き出す？」

「…ねえ、アンタさあ…拓郎君にあたしと付き合う事反対してるでしょ？」

かなり迷惑なんだけど。」

「…わかった。俺を警察でも何でも突き出してくれよっ！あんたの気が済む様に…」

「…見たんでしょ？」

「ん？何を…！？」

「あの中を…」

そう言っつて美代子が指した場所は  
この小さなアパートには似つかわしくない巨大な冷蔵庫だった…。

そして

「アンタも入る？」

美代子がやさしくそう言った…。

「な・なんだよ…アレは…誰なんだよ…」

「さあ…。誰と思う？あなたも知ってる人だと思っけど…」

「は…！？」

俺は美代子がしてきた事を全て話した…。

そして美代子の事で愛子ちゃんは泣いていた…。

「大丈夫？愛子ちゃん…」

「…うん。ごめんね…何か…」

つい感情的になっちゃって…そんな事があつたんだ…」

愛子ちゃんはゆっくりそう言った…

「がっかりした？親友がそんな事するなんて…」

「…………手紙を渡した日ね…森下君が来るのをしばらく待ってたんだ…  
1時間近く…そしたら美代子が来たの…」

委員会か何かの居残りで…今思えば嘘だったんだけど…

『愛子…何してるの？こんなトコで…』

『あ…うん。人を待ってただけど…美代子…私フラレちゃった…』  
『ヤダ！告白するつもりだったの？どうして教えてくれなかったのよ』

『…ごめんね…』

『ううん。大丈夫？』

…私、美代子の声聞いたら何だかホッとしちゃって涙が溢れてきちゃって泣いたのね。  
そしたら美代子も泣いてくれて…

「そんなの芝居だよ。その直前に俺に告ってるんだよ！？」

「うん、そこまではね…でもそのあと…」

『愛子…ごめんね』

『なんで美代子が謝るのー？』

『ううん…何となく…ごめんね…』

『チーン（鼻をかむ音）』

…つまり、少なくとも美代子は罪悪感があつたのよ…」

「…いつ美代子から俺の事を聞いたの？」

「たしか…翌日、美代子は学校休んだでしょ？」

そのまた翌日に聞いた…もう、学校中の噂だったけど…」

「待つてよ！手紙の翌日にたしか、教室の前で会った時

『あれが答えなの？』

って美代子の事じゃなかったの？」

「違うわよ。私の手紙に対する答えの事聞いたのよ…」

森下君が『そーだよ』って言うからかなりショック受けたけど…」

「そうだったんだ…美代子がホントに罪悪感があつたなら

何故愛子ちゃんに真実を話さないんだろ…」

「…そうね…」

そして、俺達二人は納得しないままそこで別れた…。

翌日

俺は学校に来るなり、けんじを探していた。

あれから留守電のメッセージを聞き、こちらから電話してもつながらないし、

家に電話しても帰って来てない…。

もしかしたら今日学校に来てるかも知れない。

そう思って探してるのだから見当たらないのだ…。

「おはよー！森下君」

愛子ちゃんが笑顔で声を掛けてきた。

「あ・美代子も一緒？」

「ううん。まだ見てないけど…どうかした？」

「けんじの奴が来てないんだ…家にも帰ってないらしい…」

「何かあったの？」

「俺の携帯に入ってた留守電を聞いてくれ」

俺は愛子ちゃんにけんじの入れた留守電を聞かせた…。

「これって…美代子の家に行った後何かあったって事？」

「わからない…教室に行ってみよう…」

教室には美代子はまだ来てなかった…。

そしてホームルームが始まった…。

「なんだー！美代子は休みなのかー？」

担任が皆に問い掛ける。

みんな興味ないのか無反応だった。

「先生には連絡なかったぞ…めずらしいな…  
けんじの奴はゆうべから帰ってないと両親から電話あったし…」

ガララ…

「遅刻してスイマセン…」

美代子が遅れて教室に入って来た…。

「何だ遅刻か…？めずらしいな…まあいい、席に着け…」

「はい…」

席に着こうとした美代子と目が合い…

「お早う。」

「…お…おう」

いつもと変わらない美代子がそこにいた。

「なあ…美代子…」

「…なあに？」

「昨日…けんじと会った…？」



「…え！？なんで？」

「…あ・いや…」

「だってあたし、けんじ君とあんまし話した事ないし…  
会ったとしても話が續かないわよ。何でそんな事聞くの…？」

「…いや…何でもない…気にしないでくれ」

美代子の態度はいたって冷静だった…。

ホントに知らないのか、それとも演技なのか…。

授業が始まり時間は経っていた。

もちろん、俺は授業に集中できない。

けんじはどこへ行ったのだろうか？

あの留守電の声は明らかにおかしかったから美代子の家で何かあったのは確かだ…。

突然、マナーモードにしていた俺の携帯がバイブしていた。

先生にバレないように携帯を取り出したら画面にけんじの名前が表示されていた…。

（けんじ！？）

電話ではなくメールだったのでメール表示ボタンを押した…。

“ 助けてくれ！今、美代子の部屋で身動きとれない状態だ。

かろうじて手が動けるからメールした。”

とだけ送られてた…。

…やはり、けんじは美代子の家にいた…！

俺は美代子にバレないようにけんじに返信した。

“場所はどこなんだ？”

ふと美代子の方をみた。

彼女は何も気付かずノートをとってた。  
どうやらこっちに気付いてないらしい。

振動がまた来た。

メールをみたら返事が入ってた…。

“場所は…。”

そこには『ある場所』を書いてあった…。  
たぶん、美代子の家だろう。

（そこならわかるはず…。ちくしょう！今、授業中だぞ！どうすれば…）

俺は今すぐにもけんじを助けたかったがどうする事も出来ない。

（ん？待てよ…）

俺はある考えを思いついた。

（授業中だったら美代子は家に帰らない…）

俺は急いでけんじに返信した。

“今、助けに行く。もう少し待っててくれ”

送信ボタンを押すなり俺は席を立った。

ガラガラ…

「ん？どうした？森下…」

「先生…気分が悪いんです…早退してもいいですか？」

「どうした？んー？確かに顔色悪いなあ」

「お願いします。マジで身体がキツイんです。自分の体は自分がよく知ってます…」

「…かなり顔色悪いから…そうだな帰って休んだ方がいいな…」

「すみません…」

俺は急いでカバンに教科書を詰めた…。

「大丈夫？拓郎君…」

「…うん。じゃあ…行くね…」

昨日のけんじの留守電と睡眠不足のせいで  
顔色がホントに悪かったのが幸いして教室を出る事が出来た。  
俺はそそくさと教室を出て、けんじがくれたメールで美代子の家へ  
向かった…。

（ここだ…）

俺は美代子が住んでるアパートの前までやって来た…。  
階段を上がり部屋の前まで歩いた。

（けんじ…今たすけるぞ…）

まず、俺はドアノブをひねった…。

…開かない…当然だよな。中にはお姉さんらしき人もいないようだ  
…。

（…どうすれば？）

ドアの横には窓があった。  
そこを開けようとしたら開いた。

（おいおい鍵かけろよ…）

だが人間が入れるほど大きな窓ではないので腕を入れ裏から鍵を…  
しかし、届かない。

中を覗くと台所になっていて目の前に雑巾がハンガーでかけられてた。

（これか…）

ハンガーを取り出し、それを棒の様に伸ばして裏から鍵を開けた。

“ガチャ”

俺は忍び足で部屋に入るとドアを閉めた。

“ボタン”

（これが美代子の部屋…？）

俺の鼓動は高まっっていく。

（けんじ！どこにいるんだ…）

美代子の部屋や美代子のお姉さんの部屋を探したが、けんじの姿がない…。

（そうだ…電話を試みよう…）

俺はけんじの携帯へ電話したが、出る気配がない。

…もしかすると気絶でもしてるんじゃないかと不安になり、あせる。

（ん？何か音がするぞ…）

耳を澄ますと確かに

“ごおおーっ”って地面に少し響く重い音がした…。

（何の音だ！？こっちからか？）

台所に行くと俺は「ぎよっ」とした…。

そこには大きな冷蔵庫が…。

「な・なんでこんなでかい冷蔵庫が…」

「あたしん家が肉屋してるからよ…」

後ろから声がした…。

俺はゆつくりと振り返る…。

美代子が立っていた…。

「実家で古くなった冷蔵庫を新しいのに換える時あたしがもらったの…。

見てみて…ここに普段使ってる冷蔵庫があるの…」

美代子はスタスタと小さい冷蔵庫の元へ歩いた…。

そしてドアを開けコーラを取り出した…。

「拓郎君も飲む？」

「…な・なんでお前…学校にいるんじゃないのか…？」

美代子はコーラをおいしそうにグビグビ飲み始めた。

「ぶはーっ！やっぱコーラは最高だわ！

これを一気に飲む快感はやめられないったらありゃしない！」

「…聞ってるのか？」

「わかってるわよ。もう一度けんじ君に電話をかけてみてよ。」

「は！？なんで？」

「いいから！ヴェツ〜！」

美代子はげっぷしながらどなってた…。

「…わかったよ」

“ピッ”

“プルルル…”

「え！？」

「うふふふ…」

笑いながら美代子はけんじの携帯をポケットから取り出した…。

「あのメールはあたしが送ったの…うふ」

「……じゃあ…けんじは？あいつはどこにいる？美代子！」

「あなたのうしろよ…うしろ…」

「え…！？」

俺は一瞬固まった。

そしてゆっくりと振り返る。

（俺のうしろ？…いや、そんなはずはない…俺のうしろは冷蔵庫だ…



そんなトコ入ったら…俺達人間は死んでしまう…)

「……………はっ…はあっ」

俺は少しずつ体の角度を変えていく。

そして同時に体が震え出して来てるのがわかる…。

「……………はあ…はあ…」

息だって苦しい…頭の中まで脈の振動が伝わる。

俺はちょうど巨大な冷蔵庫と向き合う形になった。

「…くく…何してんの？早く開けなさいよ！」

美代子が笑いをこらえながら怒鳴ってる…。

俺はそつとレバーを掴み、引っ張った。

「うわああああ…っ！！！！！！！」

俺はその場に腰を抜かした。

「けんじ……………？」

冷蔵庫の中でうつすらと目を開けながら

座ってるとも立ってるとも言えない微妙な体勢で…

まるで彼だけが時間が止まったかのように

彼は冷たく固まっていた。

「言つとくけど、あたしがけんじ君を殺したんじゃないわよ。  
彼は自分で勝手に死んだの…」

「…ウソだ！お前が殺つたんだろ！？」

俺は反射的に叫んでいた。

「違うわよ。だいたい勝手に人の家が上がって  
人の部屋あさって勝手に死んで迷惑してるのはこっちよ！」

美代子は冷静に溜息混じりに言い返す。

「…そ・そんな事信じられない！」

「とにかく…状況を話すから聞いて…」

『ホラッ！俺を警察に突きだせよ…』

包丁なんかしまつてさ。俺は乱暴なんかしないよ『

そう言つたかと思うとけんじ君あたしの包丁が恐かつたのか、  
あたしから包丁をスキを見て奪おうとしたの…

「ちよっ…やめてよ！痛い…！痛い！」

『うるさい！俺を殺す気だろ！？』

けんじ君はあたしから包丁を奪い、

あたしを掴んでこの冷蔵庫に入れようとしたの…！

あたしは必死に抵抗したわ……だって仮にも不法侵入した男よ！

何されるかわからない…腕を思い切り振り払ったの…

そしたら…あたしはバランスを崩して、

その拍子にけんじ君は自分が冷蔵庫の中に入ったの…

あたしはそのまま倒れ気を失ったの……。

…気が付いた時には朝になっていて…

あたしはてつきりけんじ君は逃げたとばかり思ってたの…。

でも、おかしいの…靴が片方落ちてたの…冷蔵庫の前に…。

これってまさか…と思って冷蔵庫を開けたら…けんじ君がこの姿に…。

きつと、彼が中に入った振動でドアも閉まったのね…

中からは開けられない旧式タイプの冷蔵庫だし…

冷蔵庫って言っても中の温度は-24だし…

あたしは気失つてて気づかなかった…。だから死んだのよ。

事故なのよ！あたしは不法侵入した男を正当防衛しただけなのよ…

！」

美代子は震えた声でそう言った…。

「…じ、じゃあなんで…すぐに警察に通報しなかったんだ…  
何故このままの状態に…」

美代子は俺を見た…。

「言えるワケないじゃない…だってまだ…まだ復讐は終わってないんだもの…！  
やっとその時が来たのに…」

「復讐…？」

美代子はゆつくり微笑んでいた…。

「…拓郎君…好きよ…」

そう言つて美代子は俺に近づいた…右手には何かを持っていた…

「お・おい…！うぎゃあああゝっ…！」

俺は体に強いシビレを感じて一気に記憶が無くなった…。

「ごめんね…これ、スタンガンなの…」

薄れて行く意識に聞こえた美代子の言葉だった…。

暗闇の中からゆっくりと明かりが差ししてくる…。

「……………う…うつ」

「気がついた？拓郎君…今ね、御飯作ってるから待ってて…」

俺はまだ痺れが残ってる身体を動かそうとしたが、思っように動かない。

「…………俺は…気を失ってたのか…？」

「…ごめんね。手荒な事して…  
でもこうしなきゃ女のあたしには押さえる事無理なもの…」

「…ん？…あれ！？」

よくみるとロープで手足を縛られ、鎖で繋がられていた。

「おいっ…！美代子！これはどういう事だ！？」

大声で美代子に怒鳴りつけた…。

「決まってるじゃない。逃げられない様にしたまですよ。当然の事ですよ？」

あなたをここまで呼ぶ為にどうしようかと考えてたけど、けんじ君の携帯で簡単にワナにハマッてくれたんだもの。

けんじ君には感謝しなきゃね…」

「いいからこれを解けよっ！美代子！」

「はあゝい。出来たわよ」 拓郎君の好きな焼肉よー。うふ」

美代子は御膳にたくさんの料理を乗せて持って来た。

「おかわりはいくらでもあるからどんどん食べてよ！  
もちろん、あたしが食べさせてあげるからねー」

「これを解けよ！」

まるで俺の声が聞こえないかのように美代子は箸を取る。

「はい、あゝん…」

美代子は御飯と肉と一緒に俺の口へ運んで来た。

ム力ついてる俺は それを拒んだ…。

それでも美代子は無理矢理にそれを俺の口へねじ込んだ。

「うぐぐう…ぐう」

「ほらあ、ちゃんと食べなきゃ…成長期なんだからね…」

続けて次の一口分箸を持って来る。

「いらない…！」

「だめよ…」

「食欲がないっ!!」

俺がそう言つと美代子は箸を置き、  
素手でごはんを肉を取り俺の口へねじ込んだ…!

「うううっ…ぐうう」

「おいしい?おいしいよね?」

美代子はやさしい口調で問い続ける。

「…う…ぐぐ…」

「かわいい!拓郎くん…きゃはは…」

こうして俺は無理やり全部食わされた。

それからあつという間に翌日となった。

美代子は俺をここに監禁してるにも関わらず、  
平気な顔をして学校に行っていないかった。

(今、何時だろう?)

俺は部屋を見渡した…。

一応、鎖で繋がれ体中ロープで縛られてるとはいえ、

なんとか移動はできる状態なのでイモ虫みたいに動きながら時計を探した…。

（あつた…。…昼12時かあ…。丸一日は経ってるな…。親は心配してんだろうなあ…。はあ…。）

…。一応、俺なりに大声を出したり、わざと大きな音をたてたりして隣の人や近所の人達に聞こえる様にしたが無反応がない…。

…。っていうかこのアパートの隣で工事が始まっていて、俺の声なんてそこで揉み消されてるようだった。

カーン…。カーン…。

ガチャツ。

「ただいまあー…。あーもう！隣の工事がうるさいわよ！ふう…。あ・そうそう！学校でけんじ君に続いて拓郎君まで行方不明になって大騒動よ…。これでバレルのも時間の問題かしら？」

「……………」。

「あ・もう少し待って…。今から口のガムテープ取ってあげるからさ。」

そういつて美代子は俺の口にしてたガムテープをゆっくり剥がしたと思うなり“ぶちゅっ”とキスをした！



びつくりした俺は離れようとしたが体が言う事をきくはずもなく為すがままだった…！

「ねえ…今日何で早く学校終わったと思う？

さっきも話したようにあなたとそこにいるけんじ君がいなくなったから

緊急集会やら何たらで学校にマスコミが集まり始めたからなの…。もう大変なのよ…！でも早く帰れて良かった！あたしまで学校に来なくなったらヤバイよね…？」

「…でも、いずればれるぜ…。」

「そうね…そうかもね。時間の問題ね。どっちが先かって事よね…？」

「どっち！？…って何が？」

俺がそう聞くと美代子は立ち上がり

「…ねえ！そろそろお昼にしようか！そうしょ…。今つくるね」

「…美代子…お前…ここで姉さんと暮らしてんじゃないのか？」

「よくわかるわね？今は地方に仕事で行ってるの…だからしばらくはいないわよ。」

「……お前…俺をどうするつもりよ……」

「……どうって？」

「…だから…」

トントントン…

「俺を殺すつもりなのか…!?!」

俺は大声で美代子に向かって叫んだ。

…ジュウウウ…

美代子は俺の大声など気にせず肉と野菜を炒めていた…。

「聞いているのか!俺を殺すつもりなのかと聞いているんだよ!」

俺はまたありったけの音量で叫んだ…。

美代子は無表情で振り向くと

「そんな大声出したって誰も来ないわよ…。あ・御飯は大盛り?」

「どういう事だよ!?!」

「…あのねー、このアパート数日後には取り壊されるのよ…。だからもう誰も住んでないの…」

「俺達だけ!?!」

美代子は御飯やおかずを運んで来た。

「そ。たくさん食べてよー。時間もないんだし…。」

「時間って…?」

「…ここが壊される前にあたし達死ぬの…」

「死ぬ?」

「そうよ。だってこのまま生きててもしょうがないでしょ?あたし一人で死ぬのはイヤよー。」

「待てよ!ホンキなのか!?」

「…本気よ。前から決めてた事なの…。はい、あぐんして…」

「…いない…」

「もういい加減にしてよ!あたしがどれだけ一生懸命これ作ってたと思っでんの!このままじゃ美代子が可哀相よ…!」

「死ぬって聞いて食欲あるかよ!」

「いいえ!絶対食べてもらっわ!美代子の為にも…」

「美代子はお前だろ!」

「……………」

「…な…何だよっ!」

「ふふ…あはははは…」

突然、美代子は笑い出すので

俺はあっけにとられていた…。

「あはははは…」

「…？…美代子…」

「ごめん…ごめんね…拓郎君…うひひ…あたし…美代子じゃないの…あははは…」

「…？…え？」

「…あたし…美代子の姉の…美佐子なの」

「え！？どういう事？だって…どう見たって…美代子本人にしか…」

「だからあ、双子だって事よ！」

美代子とあたしは双生児なの…あははは…

そっくりでしょー？顔も体形も身長も…

両親でさえ時々まちがえるくらいなもの…わかるはずないわ…」

俺は美代子…の顔をマジマジと見つめた。

美代子は満足そうに笑みを浮かべている。

「…ホントに美代子じゃないの…？」

「…違うわ。信じなくてもいいけど…」

「…じゃあ納得行かないな。もし美代子じゃないなら、何故俺をこんな目に合わすんですか？」

美代子ならともかくお姉さんには関係ない事じゃないですか…。」

それを聞いた美代子は…いや、美佐子はいきなり立ち上がった。

「関係ない！？大アリよ！あなたはあたし達二人を壊した人なのよ！あなたがいなければあたし達は苦しまずに済んだのに…！」

「俺が何したって言うんだよっ！美代子はどこにいるんだ！？ここにはいないのか？」

「……………いるわよ。…今…連れて来る…」

そういつて美佐子は奥の方へ消えていく。

（まさか…姉妹でツルんでたとは…）

俺はあまりのショックに呆然としていた…。  
すると…

ズル…ズズズ…

（ん？何の音だ…？）

ズ…ズズズ…

「うつ…くく…」

美佐子が何かを引っ張って来た…。

「お・おい…何を…」

その瞬間、俺は凍りついた…。

「よいしょ…ホラ…連れて来たわよ…」

「…まさか…」

美佐子が引つ張つて来たのは巨大なビニール袋…

「そうよ…これが美代子よ…。最近死んだのよ…」

「うわああーっ!」

俺はこの部屋に来て一番の叫び声を上げた。

「けんじ君にこれを見られたのよ。最初はヒヤッとしたけど死んじやったしね…」

「…あああ…う…な・なんでお前は冷静なんだよ。仮にも妹だろっ!」

「…冷静? あははは…冷静ならなきゃアンタとくに死んでるわよ…!  
いい? これだけは言つとくわ! 美代子の死因は自殺よ! 原因はアンタ!」

「……………!」

「美代子は最近、アンタに告白したよね?  
だけどアンタは断つた…翌日、美代子学校に来なかったの覚えてる?  
その日…美代子は手首を切つて自殺したのよ…。」

「……………!」

「アンタが断る理由はわかるわ…。だってあたし達見てのとおりブスだもの…それも双子そろって！  
醜い肉の塊みたいにさ！…あの子は思い込み激しいトコあるからアンタに切られたらもう何もなかったのよ…！」

美佐子は泣きながらビニールを開けていた…。

「…あたしは正直、人間不信だから恋なんて出来ない…だけど美代子は違ってた。

あの子はちゃんと拓郎君に恋してたし愛してた…。

美代子にとってはあたしよりも拓郎君が全てだったのよ…！」

ガサガサ…

そのビニールから美代子の顔が出てきた…

その巨大な冷蔵庫に入れてあったお陰か、まるで眠っているかのような。

「…あたしにとっては美代子が一番だった…ずっと二人で生きて来た…理解し合ってた…

だから…アンタが許せなかったの！

…でもこのままじゃ美代子が可哀相…少しでも拓郎君に近づけようと思って……んふふ」

「…？…何が言いたい？」

「入れたのよ…あなたの弁当に毎日…



美代子の体の一部を…！

美代子はあなたの体の栄養となってるの…あはははは…」

「う・うそだっ！」

頭が真っ白で無意識にそう叫ぶ。

叫ぶ事によってショックを和らげたかも知れない。

「おいしかったー？あはははは…」

（俺が…美代子を…？）

今度はすごい吐き気に襲われた…。

「うつ…！おええ」

「あはははははは…でも吐いちゃダメよ！せっかく作ったんだから…」

俺は押し寄せてくる嘔吐をこらえようとバランスをとる。

だが、目の前にある『おかず』が目に入るや否や嘔吐物が口から飛び出た。

「…おえええ…お前は人間じゃないよ！…ごほっ…美佐子！狂ってる…」

「…そうね。あなたに狂わされたもの…」

「…はあ…はあ…」

美佐子は美代子を大事そうに支え説明する。

「ほら見て…右半分無くなってるでしょ？ここをね、キムチ漬けにして焼いたら最高だったでしょ？愛子も食べたのよ…」

「…はあ…はあ…」

「……最初はアンタに復讐するつもりで近づいたわ…。でも何でだろ、美代子が乗り移ったみたいに今はアンタが好きなの…愛しいのよ…」

「…はあ…はあ…」

「好きよ。拓郎君」

美佐子は俺にキスをした。

「んぐぐぐ…」

「…あたし達にはもう時間がないの…だから…」

「だから…？」

「カラダも…愛し合いましょ…」

そっいつて美佐子は服を脱ぎ始めた…。

「ホンキで言ってるのか…?」

俺は次々と服を脱ぎ捨てて美佐子に問いかけた。

「ねえ、拓郎君あなたは女の子と経験あるのかな?」

「やめてくれ!俺は好きな子じゃなきゃカラダの関係は持ちたくないんだ…」

「ふふふ…それはりっぱな心がけね。そういう拓郎君って好きよ。でもね、さっきも言ったようにあたし達には時間がないの…あたしは拓郎君とひとつになりたいの…。」

そして、美佐子はスカートも脱ぎ下着姿になった。

「…美佐子!やめろよ!」

俺は美佐子を見る事ができないので顔を背けた…。

だが、その先には美代子の遺体があった。

俺はその美代子を見つめ、

「み…美佐子…」

「…ん?なあに?」

「……その前に……美代子を元の場所に戻してくれないか?それじゃあ、集中できないよ。」

俺は美代子を指差しながら行った。

「…あ・それもそうね…。待ってて今、戻すからさ。」

そういつて美佐子は美代子をビニールに包み奥へ引きずって行く…。

俺は視界を360度見渡す、

（な、なんとか…逃げださなきゃ…っていつてもこれじゃあ…  
なんか…なんか考えなきゃ！…）

だが、どうする事もできず美佐子が戻って来た…。

「さあ、始めましょ。でも手足のロープは解かないからね。あたしがリードしてあげる。」

美佐子は俺の上に乗り胸を顔に押し当てた…。

「どう？女の子のムネってやわらかいでしょう？気持ちいい？」

「うが…が…ふが」

「あはは…やだ、くすぐったいわよ」

その時ドアをノックする音が聞こえた…。

トントントン

「美代子？私よ！愛子だけど…」

その声に俺はすごく反応してしまう。

(…！… 愛子ちゃん！？)

俺の表情を見て、美佐子は面白くない。

「…ちっ！何の用なのよ。こんなイイ時に…でも、ムシしちゃうか…？」

「ねえー！いるんでしょ？わかってるのよ！」

そう言っただけでもドアを叩く愛子ちゃん。

「…あゝもう、うるさい！いい！？あなたは隠れてて！…余計な事したら愛子の命はないわよ！」

「…わかった…」

美佐子は服を着て玄関へ向かった…。

ガチャ

「どうしたの？愛子…」

息を切らしながら愛子ちゃんは言い放つ。

それとは対照的に美佐子は冷静そのものだった。

「…ねえ！ホントは知ってるんでしょ？

拓郎君やけんじ君の居場所…！何をしたの？あの二人に…」

「……………」

「あなたが何かを隠してるのはわかるの！」

「…何の話？なに言ってるの？」

「いいから！中に入れて！」

愛子ちゃんは隙間から部屋に入ろうとするものの  
巨大な身体には太刀打ちできない。

「…今散らかつてるし、部屋の中じゃなく、どこか外で話しようよ」

「いいの！散らかつてても…。とにかく入れてよ…」

「…………ふう。仕方ないわね。それじゃあ上がって…」

愛子ちゃんはまさか目の前に俺やけんじがいるなんて思っていない  
だろうな…。

「とりあえず、上がって…」

「…うん…」

「まったく愛子もひどいわね…あたしが犯人だと決めつけるなんて…」

「…可能性があるのはあなたしかないもの…」

ガチャツ…

美佐子はドアの鍵ゆっくりと閉めた…。

部屋に入ると、愛子ちゃんは美佐子を見つめ、

「美代子…お願いだから正直に答えて！ホントは森下君の居場所知ってるんでしょ？」

「……さあ。」

「嘘よ！あなたは何かくしてるっ！」

「なんでそんなに必死なワケ!？」

「…え？」

「愛子…あなたこそ正直に答えて…」

…好きなんでしょ？拓郎の事…」

「……………」

「黙ってないで何とか言つてよ…」

「…………好きよ…」

「知つてたわよ！前からね…！全く同じ人を好きになるなんて気の合つた友達も問題よね？」

「…………それは前にも言つたじゃない…まさか…あなた…」

「だからと言つてあたしは何も知らないわ！」

「あなた誰？」

その言葉に美佐子は目を見開く。

「…………あたしが誰に見えるの…？」

「違う…あなたは美代子じゃない…」

「どう見ても美代子でしょ？…何を根拠にそんな事言つてるの？」

「あなた…美代子まで隠してるの…？返してっ！私の友達みんな返してよ！」

愛子ちゃんは美佐子の肩をつかんで叫んでいた。



「返してっ！！みんな返してよっ！」

叫び散らす愛子ちゃんに美佐子はどんどん表情が変わって行った。  
俺は心から愛子ちゃんに『逃げて！』と念じた。

あいつは危険だ…愛子ちゃんにはこの部屋からさっさと出て行って欲しい。

だが、どうする事も出来ない。

俺は…目の前にいるのに…。

「どこ？どこなの？森下くんや美代子は…」

「…だからあたしが美代子ってば。」

すると、愛子ちゃんは家中動き回り何かを探し始めた…。

「拓郎くう〜ん！美代子！けんじくん！」

「はあ…しょうがないわね…」

そういつて美代子はポケットからスタンガンを取り出した。

美佐子はスタンガンを取り出す。  
それに気付いた俺は…

「…ん！ん！ん！ん！」

いくら俺が声を出しても愛子ちゃんは気付かない。

そして愛子ちゃんは…

「きゃあああーっ」

…ドサッ…

そのまま倒れ込んでしまった。

「きゃははは…。見た？ねえ見た？愛子の倒れ方…。マンガみたい！…ばあゝか！」

「…ん」

「気付いた？愛子ちゃん…」

「…………その声は…………森下くんっ!？」

愛子ちゃんはびっくりして起き上がろうとした…

「きゃっ…」

「だ、だめだよ。急に動いたら…」

「何コレ？」

愛子ちゃんも俺と同じように体中ロープに縛られてた。

「おっはー」

美佐子が元気な顔をして現れた。

「……………!」

「やだ…そんな顔しないで…あたし達友達でしょ？」

「あなたは誰なの？何故こんな事する必要があるの？」

愛子ちゃんは割りと冷静に美佐子と向き合っていた。

こんな状況だつてのに…意外に強い。  
俺はついつい感心してしまった。

「…………ふう。やれやれ…。それよりさ、ハラ減ってない？  
ほら、作ったのよ。焼肉ピラフ…。愛子も知ってるよね？  
うちの肉は日本一おいしい肉って…」

そういつて二人分の皿をもつて来た。

「はい…拓郎くん」

美佐子は俺の前に来て、またキスをしてきた。

「んんっ」

舌もからめてくる…。

「うふふ…大胆よね。拓郎くん…」

「…ぶはっ！お前が勝手にやったんだろーが！」

そんなやり取りを見て愛子ちゃんはポツリと言う。

「…違う。美代子じゃない…美代子はそんな事できる人じゃないもの…」

愛子ちゃんの言葉がカンに触るのか、美佐子は愛子ちゃんの髪を掴み引っ張った。

「…きゃっ…！」

「アンタさあ、さっきから美代子じゃないってうるさいのよ！  
そうさ、あたしは美代子じゃない…！美代子の双子の姉の美佐子だよ…」

「…え？お姉さん…？」

「そ。ウリ二つでしょ…？」

「…じゃあ…美代子は？けんじくんはどこ？」

「…さあ。」

「ねえ！森下くんっ！あの二人はどこなの？」

「……………」

「ねえ…！」

俺は愛子ちゃんの言葉に返事する事が出来きなくて…ただ俯いていた。

言葉にするのが怖かったからだ。

「ちょっとあたし…トイレ…あなた達は？」

バケツ用意してあるからいつでもオッケーよ。あははははは…」

スタスタ……………ボタン。

美佐子はトイレへ行ったのを確認するなり、

愛子ちゃんはこっちを見た。

「…ねえ…森下くん…あの二人はどうなったの…」

「……………」

「ねえ！ちゃんと行ってよ！」

しつこく聞く愛子ちゃんに俺は言いたくない言葉を放った。

「……………死んだよ……………」

自分の口で言うつと現実味が増してきて辛い。

「え……………！？それって……………殺されたって事？」

「……………いや……………美代子は自殺したらしい……………」

「……………うそ……………」

「けんじのやつは事故死つてやつかな……………」

「じゃあ……………お姉さんは直接的には何もしてないのね……………」

「……………ああ……………」

「……………実はね、今私の服の中にマイクがあつてね……………」

そのマイクは近くにいた刑事さん達につながってるの……………」

「……………え！？……………」

「だから会話はつつ抜けなの……………。あ・来たっ……………！」

……スタスタ……

「ふいースツキリ。」

「……………」

「さ、アンタ達あたしが作ったピラフを食べてもらっわ」

カタツ、カチャチャ

「ほら、あゝんして拓郎君……」

「……………いない……」

「まあた言っ！なんで困らせる事ばかりいつの……」

美佐子の声が大きくなる。

……頭がズキズキする……

気付けばさっきの言葉が聞こえてきた。

『死んだよ……』

自分で言った言葉が自分の声で繰り返される。

『美代子とけんじくんは？』

『死んだよ』

…ズキズキ…

『美代子けんじ』

『死んだ死よ』

…ズキズキズキ…

『…と…くんは？』

『…死…』

『美代子とけんじくんは死んだよ』

ズキズキズキズキズキズキ

『いい加減にして！子供じゃあるまいし！食べなさい！』

その言葉に目が覚めたように美佐子を見た。

すると一気に恐ろしいほどの感情が押し寄せてきた。

「……食べれない……食べられるわけないだろう……！うつっ」

「……………！？」

「…うつっ…うつ」



「あなた泣いてるの？拓郎君…」

今頃になって二人が死んだ哀しみがやって来た。  
俺はただ泣く事しか出来ず、声を震わしていた。  
涙が次から次へと溢れ止まらなかった。

「大丈夫？森下くん…」

もはや愛子ちゃんの言葉も耳に入らない。

「かわいそうに…でもね、泣いたってムダよ！さあ！食べなさい！」

美佐子は俺の口に無理やり押し付ける。

「…うう…！！」

「もうやめて下さい！お姉さん！」

「うるさいわねっ！あんたなんかにお姉さんって言われる筋合いないわ！」

バシッ…！

「きやつ…」

美佐子は愛子ちゃんに平手打ちを食らわした。

「いい！？あんたにも原因あるのよ！」

あんたがいるからこの男はあんたに惚れ、美代子はフラレたの！

「あんたが生きているから妹は死んだの！」

「……………！」

「ねえ二人とも！お願いだから返して！美代子をあたしの元に返してよおお……………！」

美佐子はその場で泣き崩れた。

「返して！……………うう……………う……………」

「……………。」

「……………。」

美代子はそのまま泣きながら眠っていた。

そして、少しの時間が過ぎた頃、

「…森下くん…」

「……ん？」

「お姉さん…あのまま寝たみたいね…」

「ああ、そうだね。彼女も精神的にかなりマイツてるだろうし…」

「このままだとお姉さんおかしくなって私達は殺されてしまうわ…」

愛子ちゃんは身体を動かしながらモゾモゾとしていた。  
ロープを解こうとしているのか…？

「…警察が来るんだろ？」

「…そうね。でもその前に…ホラッ」

そついつて愛子ちゃんは立ち上がった。

「…あっ！」

「ナイフをスボンのポケットに入れてたの…おかげで切れたわ…」

「…よかった！ほら、早く逃げろよ」

「何言ってるのよ！あなたも逃げるのよ」

愛子ちゃんがそういうと俺は首を横に振る。

「…いや…俺はこのまま残る…」

「…え？ばか言わないで！

このままだと死んじゃうかもしれないのよ！」

「……………ああ……………」

「あなた正気？そんな事、私が許さない」

「……………美代子は…俺のせいで自殺したんだ…俺が彼女を殺したよう  
なもんだ……………」

「…でも…それは美代子を選んだ事よ…仕方ないじゃない……………」

「けんじだつて…関係ないのに巻き込んだ！美佐子だつて…彼女だ  
つて追い込んだ！」

俺は思わず大声を上げた。

「しっ……………！お姉さんが起きちゃっ……………」

愛子ちゃんは美佐子を見た。

「とにかく…俺は動かない…」

「だめよ！あなたもここから出るの！」

「俺…この先…どうなるんだ？ここから出て…  
あるのはみんなを殺した罪悪感だけ…そんなの耐えられない…」

「森下くん…」

「そつよ！それならここに残るべきよ！」

美佐子ができ上がりながらそう言った。

「…美佐子…」

「愛子…もう、アンタはいいわ。許してあげる…。  
でも拓郎君はダメ。あたしと一緒に死ぬの…」

「何言ってるの？死ぬなんて一番卑怯なやり方じゃない！」

「…卑怯か…そうだな…俺は最低だ…だから死んだ方がいいんだ…」

そう言った瞬間、俺の頬に衝撃が走った。

愛子ちゃんが平手打ちをしたのだ。

「森下くんっ！しっかりして！ねえ！お願いだから…」

必死になってる愛子ちゃんを見ても俺は無反応だった。

「あはははは…おかしい！おかしいねー」

美佐子は愛子に指差しながら笑っている。

「何がおかしいのよ！森下くん？ねえ！」

「……………」

俺はただ黙っていた。

「あははは…。どいて、愛子…」

「ねえ！森下くんっ」

「どきなさいって言うてるでしょうっ！」

バシッ！

愛子ちゃんが倒れこむ。

「くっ…！」

「…………くふふ…見苦しいわ愛子…」

美佐子は俺にしがみつくように抱きついた。

「これで拓郎くんはあたしのもの…あなたから初めて奪ったわ…  
きつと美代子も満足してるはず…」

愛子ちゃんは身体を起こしながら美佐子を睨んだ。

「…あなた…カン違いしてるわ…そんな事して美代子が喜ぶと思ってるの!？」

「喜んでるわよ!美代子の事いちばん知ってるのはこのあたしなのよ!」

美代子はあなたなんか嫌いなんだから…!」

「…あなた…ホントは嫉妬してるんでしょ？」

「…なにが？」

「美代子を私や拓郎くんに取られて…」

「…!」

その言葉に美佐子の顔は歪んだ。

「だってそうじゃない?…美代子はお姉さんを置いて死んじゃったもの!」

独りで勝手に死んじゃったから…」

「違うわっ!あたしは美代子の為を思っ…」

ドンドン…!

「警察だ！ここのドアを開けなさいっ！」

ドアのむこうで声がした。

「やっと来た…」

「…愛子…アンタが呼んだの？」

「そうよ…森下くん！これで助かるわ！私達助かるのよ…」

「……。」

愛子ちゃんは俺の肩を掴んだ。

でも俺は遠くを見ているだけだ。

「さっさと開けないと、このドアをぶち抜くぞー！」

ドンー！ドンー！

「はいっ！今開けます…きゃあああ！」

ドサッ！

愛子ちゃんは美佐子のスタンガンによって倒れた…。

「まったく邪魔なオンナだわね…」

美佐子はスタスタと台所へ向かった…。

「…はあ…はあ…シビレて…動けない…」



愛子ちゃんが必死でドアに向かって動いてる姿を俺は見つめていた  
…。

そして美佐子はビニールを引っ張って来た…。

そう美代子を…

18 (後書き)

いよいよラストスパート！  
あと二回で最終話！  
感想くださいな

ズルズルと美代子を引きずって来た美佐子。

「…うそ…美代子？」

愛子ちゃんはゆっくりとビニールに近づいた…。

「…美代子はね、アンタと拓郎くんのせいで死んじゃったの…」

「…美代子…美代子おおっ！」

愛子ちゃんは美代子に抱きついて泣いていた。

そして美佐子はけんじも運んで来た…。

「…けんじくんまで…」

「…さ、死のつか」

そのまま奥に消える美佐子。

「ねえ…森下くん…美代子の半分がないけど…」

「…俺達…毎日美佐子から貰った弁当食ってただろ？  
アレに毎日少しずつ入れてたんだって…」

「…え！？それって…」

「そう…毎日食べてんだ…美代子を…」

「…うつ…うつ…」

愛子ちゃんはショックのあまり呆然としていた。

その背後から美佐子は奥から持つて来たガソリンを  
美代子とけんじにかけた…。

「…美佐子…何やってるの？」

「見ればわかるでしょ？ココを燃やして  
みんな一緒に死ぬのよ…」

「やめて！お願いだから…刑事さあん！早く来てえー！」

「そう簡単には開かないわ…ウスノ口刑事じゃない…」

「…はあ…はあ…森下くんっ！ホントに死んじやうよ！」

俺は聞く耳をもっていなかったので、愛子ちゃんを無視していた。  
美佐子は部屋の周りにガソリンをまき始めた…。  
ガソリンの臭いが鼻につく…。

「森下くん！」

愛子ちゃんの力強い声に俺は愛子ちゃんを見つめた。  
そして俺から出た言葉は、

「…愛子ちゃん…早く逃げて…」

その言葉に愛子ちゃんは凄く哀しい表情をしていた。

「そつよ愛子…。がんばって玄関まで行きなさい。もう火をつけるわ…」

美佐子はライターを取り出し火をつけた。

「……わかった。」

愛子ちゃんは顔を下に向けると

「私も一緒に死ぬ…」

身体を震わせながら呟いた。

「…！」

「森下くんが死ぬなら私も…」

「あらら。あんたまで？ホント邪魔オンナね」

ドン！ドン！

「開けなさいっ…！」

様子がおかしい事に気がついたのか、  
刑事さん達は必死にドアに体当たりしていた…。

「愛子ちゃん…ダメだよ…。君は生きて…」

「勝手な事言わないで…！あなたにそんな事言われたくないわ！」

「…美代子…いま行くからね…」

美佐子は目を閉じて祈るように言うと  
ライターを美代子に投げた。

ポッ…！

火は一気に線をなぞるように美代子を包み込んだ。

「……！」

「……！」

隣にいるけんじにも火が廻ってきた…。  
ガソリンのお陰で炎は一気に勢力を増し  
部屋の半分近くまで燃え上がっていた。  
俺は勢いよく部屋が燃えて行く光景に恐怖感を感じだしていた。

死ぬことを望んでるのに

体が本能的に危険信号を発してるのだろうか…？

「…ごほっ！ごほっ！」

愛子ちゃんが苦しそうに咳込んでいた。

美佐子は燃えてる美代子をうつとりと眺めている。

部屋の温度は上がり火はもう目の前だ…。

「……はっ……はっ……」

心臓の音が頭の中で響いてる…。

…喉もカラカラだ。

そして、ぐるぐるとある言葉が廻り始めていた…。

それは…さっきと全く正反対の

『死にたくない』…だった。

自分でも正直…驚いた。

バチバチ…

すごい異臭が鼻につく…。

この臭いが人間の焼ける臭いだと気付いた時  
俺は体を動かし、ロープを解こうとしてた。

「…森下…くん？」

「…いやだ！死にたくない！こんな所で死にたくないっ！」

必死で俺は暴れた…だが、ロープも鎖もビクともしなかった。

バチバチ…

煙が部屋を包み、呼吸がままならない…。

「これを…！」

愛子ちゃんはナイフを投げた…。

ポトツ。

…だが、鎖に繋がれてる俺にはあと一步届かない…。

「ゴホッ！ゴホッ！」

愛子ちゃんはシビレで動けない上に煙で苦しそうだった…。



「はあー…はあー…」

煙で美佐子の姿も見えなくなっていた。

それでも俺は必死に動いていた…！

「ちくしょう！…なんで…ごほっ…何やってんだ俺はあ！」

もくもく煙は広がり、ついには愛子ちゃんの声も聞こえなくなっていた…。

「愛子ちゃあーん！おーい！大丈夫かあー！ごほっ！ごほっ！」

「……………」

「はあー…はあー…」

煙は更に広がり俺までもが呼吸困難におちた。

「はっ…ぜえ…」

（俺はなんてバカだ… 美代子もけんじも美佐子も…そして愛子ちゃんまでも  
巻き添えにするなんて…俺と知り合った為にみんな幸せになれない  
なんて…どうかしてる…）

うつすらとしてる意識の中で声が聞こえる。

「おいっ！大丈夫か！？今、ロープと鎖を…」

「はっ…はっ…」

やって来た男は俺の鎖とロープをいとも簡単に解いた。

「ホラッ！もう動けるだろっ！」

「…は…うん…」

「俺の肩につかまれっ！」

「…うん…ゴホッ」

俺は肩につかまりドアに向かって歩き出した…。

だが、この男の声…聞き覚えのある声だ。  
すぐく身近で聞いたことある…。

ふと、目に入る倒れてる愛子ちゃんの姿。

俺は夢中で駆け寄っていた。

「…愛子ちゃん…！」

愛子ちゃんを夢中で抱き上げるとドアに向かって歩き出す。

「いかないでええ！」

突然、煙の中から美佐子が出てきた…。

「あたしを置いてかないでよおお〜」

美佐子は俺にしがみついた。  
よく見ると美佐子の背中では燃えていた…。

「あつい！あついよお！いやあああつ！」

「離せっ！俺はどうしても愛子ちゃんを助けたいんだっ！」

「いやよ！離さない！アンタも道連れにしてやるんだからあ！」

「離せよっ！」

ブオオオーツ！

火が風のように揺れている。  
そして俺達は包まれていた…。

「いやあああ！いやよ！…え？誰っ！？」

「美佐子！離せよ！」

だが、美佐子は俺の声が聞こえてないのか、俺の足から手を離さなかった…。

燃え上がる炎は美佐子の背中から腕に広がっていく。

美佐子を包む衣類の焦げ臭い臭いと身体を包む皮膚の焼け爛れる臭いが混じり

息が出来ない状況になっていった。

それよりもしがみついている美佐子から  
自分に火が移って来ないか不安で必死に払いのけようしていたが、  
上手いかない。

「きゃあああ！あつい！あついよおお！」

「離せっ！離せよ！離すんだっ！」

「いたい！引つ張らないでええー！助けて！拓郎くん！  
誰かが…誰かがいるのぉ！煙の中に…！」

美佐子は叫びながら俺の足から手を離れた…。

「やめて！あたしだけ死ぬのはいやああああああ…！」

すると、何故か美佐子はズルズルと火の中へ消えて行った…。

まるで何かに引つ張られるように…。

19 (後書き)

次回いよいよ最終回！  
どんなラスト迎えるのかお楽しみに！！

「はぁ…はっ…」

俺はとにかくドアの方へ歩いた…。

何故かしらないが美佐子は炎の中に引きずり込まれた。

今が逃げるチャンスだ…！！

…拓郎くん…

「…え…？」

…ごめんね…。

俺は声の下後ろを振り返る。  
だが誰もいない。

火と煙の中で聞こえた俺の幻聴…

…まちがいなく美代子の声だった。

ブオオオーッ！

「はっ…はっ…」

ブオオオオーッ！

「はぁ…もうダメだ」

もう少しでドアという所で、俺は倒れた…。  
煙と熱さのせいではほとんど意識がなくなりかけていた。  
愛子ちゃんは目を開ける様子もなく、死んだように眠っている。

「はっ…はっ…もう…ダメだ…」

ブオオオオオオッ

その時…

「おいっ！大丈夫か？おい…ここだ！」

ドアをやぶってはいって来たのは刑事さん達だった…。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

「おいっ！意識はあるか…？」

「…はぁ…はぁ…」

「こっちには女の子がいます…！」

「…はぁ…愛子ちゃん…はぁ……」



「こつちには焼死体があります…！」

「とにかく彼らを運ぶんだっ…！」

「はいっ…！」

こうして

俺と愛子ちゃんは無事に救出された…。

数日後。

俺と愛子ちゃんはある病院に入院していた。

軽い火傷で済んだが、大事をとってしばらく居る事になった。

「…外はいい天気ね。あの時がまるで嘘みたい…」

「うん…そうだね…」

俺と愛子ちゃんは外に散歩に出ていて、先日の火事の時に美代子に助けられたこと話した。

「信じられない…。美代子に助けてもらったなんて…」

「…ああ…俺もだよ。けどホントなんだ…。  
あんな狭い家なのに俺達に火は来なかった……」

俺が必死にドアだと思って歩いてたトコはあの巨大な冷蔵庫だったんだって！

冷気のおかげで火が防げたんだってさ。

しかも俺のロープ解いたの刑事さんと思ってたけど  
誰もそんな事してないって言うから…もしかすると  
あれはけんじだったかも知れない…」

「…助けられたのね…わたし達…。」

「ああ…！感謝しないとね…」

愛子ちゃんは一步先に歩くところちへ振り向いた。

「でも、わたし達助かって良かったの？」

「…良かったんじゃない？一応、俺達ふたりが結ばれたって事はハッピーエンドだろ？」

「…うん…」

「…愛子ちゃん…君が生きると言っただよ？けんじと美代子に助けてもらったんだからさ…」

「…そうだね…」

俺は力強く愛子ちゃんを抱きしめた。

「…愛子ちゃん…ずっと好きだった…」

「…わたしも…」

そういつて俺達はキスをした…。

今までにないような解放感いっぱいのお愛のあるキスを…

「…拓郎くん…これプレゼント…」

「お？なに？突然…」

「ホラ今日で付き合って一ヶ月じゃない？だから…」

「マジで？俺は用意してないよ…ごめんね。中身はなに？」

「ふふ…開けてみて。」

俺は愛子ちゃんからもらった箱を開けた。

「……お。これかぁ…なるほどね。」

「ふふ…なるべく生きてる時と同じ姿の方がいいかな？って…」

「だから『姿焼き』なんだね…？うまそう…」

「うん…うまそうな…『ねずみ』でしょ？」

「もちろん、味付けは『キムチ』だよな？」

「もちろん！ねえ！今食べてみて！」

「…じゃあ一緒に食べよ…」

「…うん。」

俺と愛子ちゃんはその『ねずみ』をゆっくりと口にする。

「やっぱ、うまいわ。肉は…」

「うん…そうね。これも美佐子さんのお陰よね。こんなおいしいモ

ノを教えてくれたんだから……」

「そうだな。あんなに……『人間』がうまいなんて知らなかったし……でも……これじゃあ物足りないよ……」

「……そうね。ホントに食べたいモノはアレだもんね……」

そういつて愛子ちゃんは目の前にある公園を指差した。

「……ああ。そうだな」

「……きつとおいしいはずよ……」

すると、立っている場所にボールが転がって来た。

「……………」

奥から小学5、6年の男の子が走ってきた。

俺と愛子ちゃんは顔を見合わせ、ゆっくりと唾を飲み込んだ。

「……もう限界よ……拓郎くん……3日も寝てないの……あなたならわかるよね?」

「…ああ。でも…これはいけない事だよ…やってはいけない…」

「すいませーん。ボールこの辺で見ませんでしたか…？」

男の子は息を切らしながら声を掛けて来た。

「…見たよ。…向こうにあるよ。一緒に探してあげる…」

「ありがとうございます。」

男の子はニコリと笑ってボールを探し出した。

「…いけない…いけない事なんだ…」

俺はそう言いながら男の子の頭くらいの高さの石を持ち上げ、男の子の頭に勢いよく振り下ろした。

ゴンッ

「…いけない事なんだ…いけない…」

俺がそう言つと愛子ちゃんはニコリと笑い、

「おいしそつ。」

…と言呟いた。

E  
N  
D

## 20 (後書き)

王道なパターンで終わってしまいました(笑)  
ぜひ、感想をくださいな  
ここまでよんで下さってありがとうございます。  
また近い内にお会いしましょう！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5688a/>

---

blue spring

2010年10月28日03時34分発行